



TITLE:

看護学生のコミュニケーション能力の醸成を目指す授業の試み (教育活動報告2)

AUTHOR(S):

菅, 佐和子; 宮島, 朝子; 岩村, 智子

CITATION:

菅, 佐和子 ...[et al]. 看護学生のコミュニケーション能力の醸成を目指す授業の試み (教育活動報告2). 京都大学医学部保健学科紀要: 健康科学 2006, 2: 41-45

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/39572>

RIGHT:

看護学生のコミュニケーション能力の醸成を 目指す授業の試み

菅 佐和子, 宮島 朝子, 若村 智子

1. はじめに

「コミュニケーション」という言葉には、重層的な意味が含まれている。

多田¹⁾は、コミュニケーションの機能として①「情報や知識を『伝える・知らせる』こと」、②「意志や感情の伝え合い」、③「人と人とのかかわりづくり」の3つの側面をあげ、②の機能は「説明、説得、納得、共感」などの行為となり、③の機能によって『相互理解、相互啓発が生じ、創造的・発展的な関係が構築できていく』と述べている（番号は筆者が付記）。

看護師の仕事には、この3種の機能のすべてが深く関わっている。そのため、看護教育においてコミュニケーション能力の向上を図ることは不可欠であるとみなせよう。

また、コミュニケーションには、言葉の他に、表情、身振り、雰囲気²⁾および描かれた絵、造形作品などの非言語的媒体が重要な役割を果たしていることは周知の事実である。それらは、時に、言語化されない、微妙で奥深いメッセージを伝えあうものである。そのような非言語的交流に対する豊かな感性を醸成することが、看護教育において是非とも望まれるところである。しかし、この目的のための有効な方法論を構築するのは、実のところきわめて困難なことであろう。

なぜならば、非言語的交流をも含むコミュニケーション能力とは、その個人の「人となり」と深く関わっているからである。

筆者らは、保健学科看護学専攻開設に際し、基礎看護学を担当する教員として、まず、1回生担当の『コミュニケーション論』（前期・15時間）という授業を、できるだけ実りの多いものにしたいと考えた。

科目担当教員である筆者のうち1名（菅）は、臨床心理士³⁾として、また、他の2名（宮島、若村）は看護師⁴⁾として、従来からコミュニケーションに関わる教育に携わってきた。その過程の中で、それぞれがコ

ミュニケーション教育の重要性と「むずかしさ」を痛感してきたと言えよう。

菅は、平成12年度～15年度に、「言語・非言語的コミュニケーション」をテーマとして、精神科作業療法学および文学（連歌）の専門家とのリレー講義の形式で、「コミュニケーション学」（京都大学医療技術短期大学部総合教育科目・30時間）を担当した経験を有している。この科目は閉講したが、保健学科の新設に伴い、看護学専攻専門科目として、新たに『コミュニケーション論』が開講されることになった。そこで、看護学の立場からコミュニケーション教育の経験を有する宮島・若村との連携により、看護学生の特徴を踏まえたコミュニケーション教育プログラムの開発を目指したいと考えた。本報告は、そのための第一歩となるものである。（但し、今回は、量的研究を意図したものではなく、授業経験のありのままの報告であることを明記しておくたい。）

2. 目的

看護学生のコミュニケーション能力醸成に役立つ授業プログラム作成のたたき台として、平成17年度「コミュニケーション論」の授業内容を報告し、将来に向けての吟味を行う。なお、本年度の授業内容は、筆者ら3人が、それぞれ過去の授業において実施してきたものを、そのまま踏襲している。

3. 授業内容

この授業は、受講学生（実質64人）を8人ずつの8グループに分けて、グループワークの形で実施した。原則として、毎回の授業終了時に、口頭または用紙記入の形で質問・感想などを聴取した。質問については、次回の授業中にできる限り解説を加えた。本報告においては、紙幅の都合上、感想・質問および解説についての詳細は省略し、頻度の高い感想等を例示するにとどめた。また、今回は授業プログラムを事前に学生に提示しており、内容の途中変更は行わなかった。

第1回・第2回（2コマ連続授業・教員3名）

(1) 伝言ゲーム（主指導・若村）

目標：情報の正確な伝達

看護の現場においては、まず、情報を正確に伝える

という機能①がきわめて重要である。もし、投与する薬剤の名前を誤って伝達すれば、深刻な医療ミスにつながりかねないからである。そこで、授業の第1回目に、正確な情報の伝達が如何に困難であるかを学生に体験してもらうため、『伝言ゲーム』を施行した。情報の内容は、意志や感情の絡まない、ごく単純なものに限定した。

まず、グループごとに縦1列に着席させ、先頭の学生に情報（病棟で療養者から頼まれた伝言や購入物品名など）を書いた用紙を5分間提示。その後、用紙を回収、記憶を頼りに順次後ろの席の学生に情報を伝達させた。最後尾の学生に、受けた伝言の内容を筆記させ、最初に提示した用紙と比べてみると、情報の歪曲や漏れ落ちが実に多いことが判明した。ただ、買い物の品名の中で、日ごろ学生にも馴染み深い飲料水の名前だけはすべてのグループで正確に伝わっていたのが印象的であった。

この伝言ゲームを行ったことで、多くの学生が、如何に人間の記憶が曖昧で歪曲されやすいかと言うことを痛感し、「大切なことは、記憶に頼らず必ずメモをとるようにしたい」という気づきを得たようであった。

伝言ゲーム終了時点で、まず4つのグループを(2)、残りの4つのグループを(3)に導入し、後で交代させた。(2)と(3)は、別室にて施行した。

(2) 空間の手がかり

目標：空間のつながりがコミュニケーションにどのような影響を及ぼすかを体験的に知る。

①ベッドに寝ている場合

設定は、「ベッドに横たわっている療養者のもとへ、援助者が始めて挨拶に訪れる場面」とした。療養者役の学生がストレッチャーに横たわり、援助者役の学生が、ストレッチャーの頭側、斜め上方、真横、斜め下方、足下の5方向、5メートル地点から接近、療養者は「これ以上近づいてほしくない」と感じた地点で合図をし、その距離を確認した。

条件としては、身長、性別、スピード、音声、利き手などいくつかのバリエーションをつけて行った。

体験の後、条件の違いによって距離・方向・視線などがどのように受け止められたかについて話し合いを行った。

学生の感想例；「今まで、考えたこともなかったが、ベッドに寝ている人にどこからどのように近づくかによって大きな違いが出ることに驚いた。」「ベッドに寝ていると、あまり周囲の状況がつかめないことが分かった。頭の側から近づかれると、すぐそばまで来ないと分からないので、とても怖かった。足下から近づいてもらうのが一番、安心できた。」「横から近づかれるのが一番、怖かった。」「無言で近づかれるより、声

かけをしながら近づいてもらうほうがずっとよかった。」などであり、看護場面でベッドに寝ている患者に近づくときの留意点に気づいたように見受けられた。

②相談場面

援助者が椅子に座っている療養者の相談に乗る場合、両者の座る位置、角度、距離、机やスクリーンの有無などが療養者の受け止め方にどのような影響を与えるかを体験してみた。体験の後で、さまざまな条件の違いによって療養者の感じ方がどのように異なるかについて話し合いを行った。

学生の感想例；「聞き手との距離によって、話しやすさが変わることが分かって驚いた。」「正面よりも斜め前に座ってもらうほうが話しやすかった。」「閉ざされた空間は圧迫感があり、窓際に座るとゆったりと気持ちが落ち着き、リラックスできた。」「人と話す場面を、物理的距離や位置の観点から考えることに、とても興味を持った」などであり、患者の相談に乗る場合に位置関係などにも配慮が必要なことに気づいたように見受けられた。

(3) 相手の気持ちを『察する、思いやる』とは？
(主指導・宮島)

目標：粘土で作られた作品を通して、相手の気持ちをどの程度察することができるか試してみる。

(演習中、粘土の作品をデジタルカメラで撮影しておく)

まず、グループごとに輪になるように着席させ、学生同士の会話は禁止。各自の机に板に載せた油粘土の塊(500グラム)を配布。

〈教示〉

①「今の思い、悩みなどを、粘土の形にして表現してください。』。(約10分間)

②「自分の作品を、右回りで一人おいて隣の人に渡してください。』

③「渡された人は、その相手の気持ちになって、作品に手を加えてください。』(約5分間)

④「手直しした作品を、再びもとの人に戻してください。』

⑤「もとの人は、手直しされた意図を汲み取り、さらに自分の気持ちを加えて作品を完成させてください。』(約5分間)

終了後、この粘土細工のやり取りを通して、作った人と受け取った人の気持ちがどのように推察されたのか、思いが一致した点、異なっていた点を挙げ、「相手の気持ちを察する、思いやる」ということに関して、自由に話し合いを行った(約10分間)

学生の感想例；「私の表現した思いは、相手には違った風に受け取られた。抽象的なものを通して自分の気持ちを伝えることはとても難しいと実感した。し

かし、現実には、言葉以外のものを介したコミュニケーションの機会は多いだろうし、大切だと思った。」「他人が作った粘土の形にこめられた気持ちを読み解くのは、私には、難しかった。」「言葉なしに、形だけで気持ちを理解しあうのは、なかなか難しかった。しかし、黙々と粘土をこねていると、かなり集中でき、普段は気づかない自分の気持ちを発見することができた。」などであり、「難しさ」と「興味深さ」の両方が感じられたように見受けられた。

第3回授業（これ以降、担当教員は菅1名）

(1) 聞き手の態度・反応の影響

目標：聞き手の態度・反応がコミュニケーションにどのような影響を及ぼすかを体験してみる。

1 グループのうち2人ずつがペアになり、向き合って座る。語り手は2分間、「自己紹介」をした。聞き手は、何も反応せず、下を向いたままだった。

2 役割交代し、語り手は「最近うれしかったこと」について2分間話した。聞き手は、否定的な言葉は発せず、視線を合わせてうなずいた。

3 再び役割交代し、語り手は「最近辛かったこと、悔しかったこと」について2分間話した。聞き手は、話とはまったく関係のない別のこと（携帯電話を触るなど）をしながら聞いた。

4 お互いに、感想を話し合った。

学生の感想例：「相槌がないと、話が续かず、とても居心地が悪かった」

「話を聞きながら、他の事をされるととても腹が立った。自分も人の話を聞くとき気をつけなければと実感した。」「しっかり視線を合わせてもらとうれしかった」などであり、対話の際の聞き手の態度・反応の重要性に気づいたように見受けられた。

(2) 相談場面での「望ましい聞き方」とは？

目標：「望ましい聞き方」について、日常生活の体験を想起しつつグループで自由に話し合い、イメージを形成する。

〈話し合いのテーマ〉

1 「自分が誰かに相談に行ったとき、『こういう対応はされたくない!』と感じたのは？」

2 「反対に、『こういう対応をしてもらえてよかった!』と感じたのは？」

3 「それでは、自分が誰かの相談にのるとき、どのような対応をしたいと考えるか？」

学生の感想例：「相談しに行ったのに、上の空で話を聞かれたり、軽く受け流されたりするのは、とても悲しい。」「自分の心の中身を人におつけることができると、すっきりする。そのためには、じゅうぶん時間をとって聞いてもらいたい。」「やはり、親身に話を聞いてもらいたい。そして、こちらの気持ちを理解した

上で、アドバイスをしてほしい。」など、相手に心のこもった親身な対応の重要性を指摘する声が多く聞かれた。

第4回授業

(1) これまでの実習を踏まえての「まとめ」として、以下の諸点について講義を行った。

目標：基本的知識の整理

〈講義内容〉

① 聞く力を育てる（相手の話にじっくり耳を傾ける、内容の把握、共感的理解）

② 自分の考えをまとめる力を育てる（聞いたことについて自分なりの考えを持ち得るか、その論旨が整理されているか）

③ 自分の伝えたいことを、相手が理解できるように表現し、伝える力を育てる

(2) ロールプレイを通しての対話（言語交流）の練習

目標：心の通い合う対話のための、基本的な応答技法の習得

ロールプレイを用いた授業の試みについては、臨床心理学においても看護学においても、すでに周知のことである⁵⁾。この授業では、10分間の対話のプロセスを、便宜上、起・承・転・結の4段階に分けて演習を行った。

起：対話の始まり（2分）相槌・うなずき・鸚鵡返し
承：対話の深まり（3分）質問・話の整理・共感の言語化
転：対話の展開（3分）話し手の気づきを促す、あるいは控えめな助言・提案など
結：対話の締めくくり（2分）こころの『蓋』をそっと閉める

架空状況の設定：「話し手は自転車事故で怪我をして入院中の青年。

聞き手は看護師。場所は病棟内談話室。時刻は消灯後。青年は、後遺症や、入院費のことなどで不安を抱えている。」というストーリーを学生に提示した。4人のグループ内で2人ずつのペアを作り、順番に『聞き手（看護師）』と『話し手（入院患者）』と『観察者』の役割をすべて体験した。その後、感想を話し合った。今回は、時間の制約上、「起」と「承」の部分のみを行い、質疑は次回にまわした。

第5回授業

第4回に引き続き、同じ形式でロールプレイの演習。「転」と「結」に進み、全体を通しての流れを体験。その後、感想を話し合った。

学生の感想例：「対話という、本来自然体で行われるべきものを、意図的に段階で区切ることへの戸惑いがある」、「承から転への移行が、分かりにくかった」

など、本来は便宜的な目安である起・承・転・結という区分に対して、疑問を感じる学生と、厳密に遵守しなければならないと感じる学生の両方が存在することが見て取られた。『型』への反発と『型』の過剰な遵守を生じさせないような指導上の工夫がのぞまれるところであろう。また、「相槌やうなずきが大切であることがロールプレイをやってみて、実感として感じられた」「沈黙が支配したとき、本当に困ってしまった」という、これまでの授業で学んだことが追体験された様子が顕著にうかがえた。

第6回授業

ロールプレイの締めくくりとして、グループ内で2人ずつのペアを作成、状況と聞き手は前回と同様に設定した。話し手のみ各学生に自分自身で架空の患者像をつくりあげてくるよう、前回終了時に課題を与えた。それに基づき、「起・承・転・結」20分間のロールプレイを行った。観察者はおかず、交代で話し手と聞き手の両方を体験した後、感想を話し合った。

最後に、この授業（6回）を受けたことによって、自分のコミュニケーション観に何らかの変化があったか否かなどを問うアンケート調査を施行した。

学生のロールプレイに対する感想；「これまで、相談に乗るときにはアドバイスだけが大切だと思っていたが、その前に、相手の話をよく聞くこと、共感することが大切だと言うことを知った」「まったく知らない人に対して、相手の気持ちを理解し、それに対して共感を示し、適切な助言をするということがどれだけ難しく、大変なことであるかを実感した。」「ロールプレイの起承転結を意識することは、人の気持ちを枠で仕切っているようではじめは嫌だったが、話し手は話しやすくなり、聞き手も自分の考えを整理しやすくなるので、やはりカウンセリング技法を勉強したいと感じるようになった。」などの感想が出され、面接を深めることの意義と困難さが感じ取られたように見受けられた。（なお、対話時間が10、20分というのは、臨床心理士の立場からはあまりに短い気がするが、看護場面の多忙さを考慮すれば、まず、短い時間で心の通い合う過不足のないコミュニケーションができることが重要と考えて設定したものである。）

4. 授業を終えての考察

今回は、初めての試みであり、各教員が自分の従来の授業経験を踏まえてコミュニケーション能力の醸成にとって有用と考える内容を織り込んで授業案を作成した。そのため、内容が多岐にわたり、あまりに盛りだくさんになったきらいは否定できない。しかし、学生にとっては、毎回の授業が目新しく刺激的であり、モチベーションの低下を防ぐ効果があったようにも感

じられた。今後は、まず、授業内容の整理・改良に着手したい。

将来、看護の現場に出た場合、主観によって影響されることのない、情報・知識の正確な伝達能力が何よりも重視される。それと同時に、患者や家族との人間関係においては、言語化されるか否かを問わず、相手の微妙な感情を読み取り、それに即応した反応をする共感能力（主観の絡むもの）が不可欠となってくる。わが国の文化においては、この「雰囲気を読む」「行間を読む」ということが自明のこととして求められているといえよう。この、いささか趣の違うコミュニケーション能力を両方とも十分に兼ね備え、使い分けることが、看護職を目指す学生には求められているのである。これは、口で言うのは簡単であるが、現実には、相当の困難を伴うことを覚悟しなければならないであろう。客観性や正確さを追及しつつ、同時に、曖昧なものを曖昧なまま受けとめるのは、至難の業であろう。しかし、それは、看護の質の深まりにとって避けては通れないことと考えられる。

その点について、学生からは「この両面を兼ね備えるのは、本当に大変であると痛感した。」「相手の感情を汲んだ柔軟な対応をするためには、相手に対して親身になって話を聞くことがまず必要である。そうすることで、重要な情報を逃すことなく聞くことができ、相手の感情を考慮に入れた対応をすることが可能になると思う。」「まずは、医療や福祉制度の知識を十分に持っていることが必要だと思う。それがないと、患者さんは安心してナースに頼れないし、ナースも的確なアドバイスはできない。その上で、その知識・情報の使い方も考慮する必要があるだろう。」「単純に自分の知識だけでケアができるのなら、それは看護師の意味がなくなってしまう。相手の性格、心境、境遇などを一人ひとり把握して臨まなければならない。そのために、自分自身が、常に社会に目を向け、友達関係や上下関係などのさまざまな苦しみや辛さを体験し、蓄積を増やしていきたい。」など、各自の実感に基づいたさまざまな感想が寄せられた。これは簡単に結論の出るような問題ではないが、学生自身が今後の方向性について考えるひとつの機会となったことが伺えた。

学生の中には、少数ではあっても、「コミュニケーションという自然な営みを授業で教授することが果たして可能なのか」という根源的な問いを投げかけてくるものも存在した。たしかに、限定されたわずかな授業時間の中でそれができるとは考えにくい。しかし、自然に任せていれば豊かなコミュニケーション能力が醸成されると信じるのは、現在では楽観的過ぎるであろう。我々の社会におけるコミュニケーション不全是、いまや深刻な社会的問題となって久しいのである。できるならば、卒業までの各年度に、コミュニ

ケーション能力の向上につながるような多彩な授業を
配当し，また，授業以外の場においても学生と教職
員，学生同士などの豊かな交流の機会が提供されるこ
とが望まれるところである。

文 献

- 1) 多田孝志：二十一世紀に必要なコミュニケーションと
は，児童心理，2005；7：1-9
- 2) 高良 聖：雰囲気としての心理面接，東京，日本評論
社，2005
- 3) 菅 佐和子 編著：看護に生かす臨床心理学，大阪，朱鷺
書房，2000
- 4) 宮島朝子，若村智子，片山由美，斉藤ゆみ：健康を基盤
とする看護教育の意義。京都大学医学部保健学科紀要・
健康科学，2004；1：73-78
- 5) 米谷 淳，畑 吉節未：共感ロールプレイを取り入れ
た看護学生のための対人コミュニケーション入門。大学
教育研究集会発表論文集，2004；3：60-61